特集　世界天文年を盛り上げたのは誰か

大川拓也（世界天文年 2009 日本委員会事務局／国立天文台）

1. はじめに

2 月 28 日の関東支部会の発表では、世界天文年 2009 日本委員会事務局（以下、「事務局」と称す）の保有するデータを交えながら、クイズ形式で世界天文年の成果を振り返りました。

2. 穴埋め問題です

発表ではまず 2009 年の復習として、「世界天文年 2009 日本委員会は研究・教育・普及の主要な団体で組織されていた」ということをあらためて確認し、その体制（図 1）を思い出していただきました。もちろん天文教育普及研究会もその一翼を担い、「日食グラスで月にかくれる太陽を見よう」など、教育的に意味のある取り組みが展開されました。

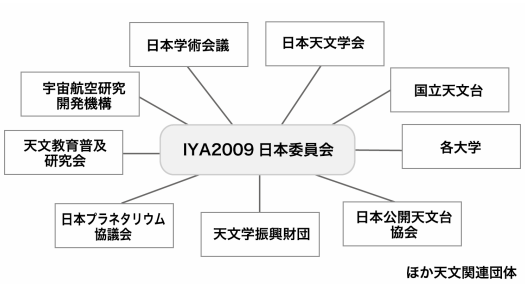

図 1　世界天文年 2009 日本の体制

さて、世界天文年のどんなシーンでどんな方々が活躍したのか思い出していただくために、穴埋め形式の出題です（図 2）。

「世界天文年は、日本委員会の当初の予想をはるかに上回る広がりをみせ、研究・教育・普及だけでなく、（　ア　）や（　イ　）の方々がさまざまな企画を展開しました。」

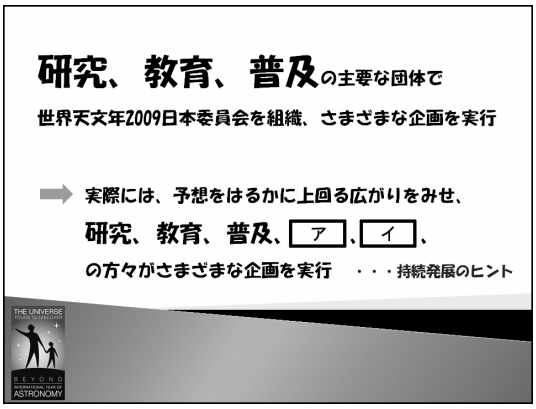

図 2　空欄アとイに当てはまる語句は？

空欄アとイにはどんな語句が入るでしょうか？　ノーヒントではピンと来ないかもしれません。ヒントとして、世界天文年 2009 日本委員会公認イベント[1]（以下、「公認イベント」と称す）の途中集計データや、企業活動の実例を示しました。

3. 特筆すべき流れ

公認イベントの集計からは、世界天文年の広がりを特徴づける注目すべき傾向を読み取ることができます。JPA（日本プラネタリウム協議会）、JAPOS（日本公開天文台協会）、PAONET（公開天文台ネットワーク）の会員かどうかを問う申請時の選択肢に対して「どれでもない」と分類される主催者が約 7 割を占めるという事実です。また、公認イベント主催者の種別を調べたところ、生涯学習施設が約 3 割を占めるものの、民間企業・事業者、同好会・サークル、有志・個人に分類される主催者も意外に多いという結果も出ています[2]。研究・教育・普及に携わる方のみならず、草の根すなわち組織に属していない方々によ

る自発的な企画が多数展開されたことは特筆に値します。

企業による取り組みも多様でした。例として、全国に店舗をもつスーパー「ダイエー」の皆既日食中継イベント「ダイエースペシャル LIVE！『【奄美】皆既日食中継』」をご紹介しました。優れた解説コンテンツやワークシートも整備され、日食当日（2009 年 7 月 22 日）にはダイエーの店頭に全国で約 1 万人もの子どもらが集まり、奄美大島にあるダイエープラザ大島店からの中継映像や、日食の解説に関心が集まったようです（図 3）（お天気は残念でした）。スーパーマーケットのネットワークという、最も身近で地域に根ざしたインフラを天文に活用したのは、教育や普及の方ではなく、企業の熱意ある企画チームだったのです。

図 3　全国のダイエー93 店舗でのインターネット中継による観察会の様子
（写真は公認イベント実施報告より）

また別の例として、ロッテが実現した企画をご紹介しました。チョコレート菓子「パイの実」の期間限定商品のパッケージ（図 4）に世界天文年や天文現象（日食・流星群）のわかりやすい解説や、「めざせ 1000 万人！みんなで星を見よう！」の QR コードが入ったのです。さらに連動企画として種子島の皆既日食体験キャンプに参加するキャンペーンが展開されました。身近なおやつが宇宙への興味の入口となったのです。

図 4　パッケージに世界天文年や天文現象の解説が入った期間限定のロッテ「パイの実」

というわけで、空欄アとイを埋める正解は、「草の根」と「ビジネス」としました。世界天文年が終了したいま、あらためて一年間を振り返ると、研究、教育、普及のみならず、全国組織に属していない草の根の天文ファンや、商品開発やプロモーションなどビジネス志向の方々が、自発的な企画を実現しようと生き生きと取り組んでいたことが思い出されます。

発表内容の報告は以上です。

4. 世界天文年、その先へ

世界天文年 2009 日本委員会は 2010 年 3 月末に解散しましたが、その後継組織を立ち上げる動きがあります。3 月に開かれた日本委員会として最後の会議では、日本の天文研究・教育・普及・アマチュア活動を結ぶ「日本天文連絡協議会（仮称）」結成を呼びかける素案が作られました。現在、世界天文年 2009 ウェブサイト[3]には、発起人代表海部宣男委員長とする呼びかけ文などを掲載しており、

広く賛同や参加を求めています（図 5）。世界天文年のさまざまな企画のノウハウや人のネットワークは、今後も生かしていくべきものです。「日本天文連絡協議会（仮称）」には、天文教育普及研究会の積極的な関与も期待されています。

なお、筆者のいる事務局は 5 月現在も国立天文台内に細々と存続しており、世界天文年の国内状況をまとめる報告書の編集・制作にあたっています。報告書は今後の活動の参考になるよう、国内企画の内訳など各種データも掲載します。世界天文年の公式な記録として関連団体や各機関に提出するほか、ウェブ公開する予定です。

BEYOND

世界天文年　その先へ。

日本の天文研究・教育・普及・アマチュア活動を結ぶ
「日本天文連絡協議会（仮称）」結成の呼びかけ

—世界天文年2009の成果を受け継ぎ日本社会に科学の理解を広げるために—

かねてご協力いただきました世界天文年2009は、世界的にも国内でも非常な活況のうちに幕を閉じました。この間のご支援・ご協力に、深く感謝申し上げます。

世界天文年2009を提案・主催した国際天文学連合（IAU）では、IAU加盟国をはるかに上回る参加が得られた世界天文年の発展を受け継ぎ、IYA2009 beyond として2010年にも活動を一部継続することを決定しました。その一環には、アマチュア天文家との協力の強化も含まれています。また世界天文年を通じて実証された科学への扉・教育のプラットフォームとしての天文学の大きな役割を踏まえ、IAUの新たな試みとして、「発展途上国のための天文学」に10年計画で取り組むことになりました。

日本国内では、オール・ジャパンの共同に支えられた世界天文年2009日本委員会が組織され、国立天文台に設置された事務局の献身的な活動と相まって、世界的に注目される多彩で意義深い活動が展開されました。皆既日食への関心をはじめ、ホームページアクセス数5000万、「めざせ1000万人！みんなで星を見よう！」企画の「星を見ました」報告のべ730万人、全国各地の公認イベントおよそ2900件という数字は、この1年、いかに多くの人々が天文学を楽しみ宇宙に思いを馳せたかを示しています。この活動を通じて実現した研究・教育・普及・アマチュア天文家の間の多様な協力は、かつてないものでした。

昨年12月に神戸で開催された「世界天文年2009グランドフィナーレ」では、この成果を今後どのように活かし、持続的に「科学への扉」としての天文活動を広げてゆくかが議論され、「世界天文年2009 グランドフィナーレ宣言」が採択されました。宣言は、「この1 年がもたらした驚きと感動、連携とネットワークをさらに拡げ、2010 年以降も未来に向けた活動とその発展を目指すことを誓い、ここに宣言します」と結んでいます。

今年3月に開催された世界天文年2009日本委員会は、活動を締めくくる総括会議において世界天文年2009がもたらした多くの実りと上記宣言の精神を確認し、今後、研究・教育・普及・アマチュア活動が一体となって天文と科学を推進してゆくため、天文関係者を網羅した新たな協同組織として、「日本天文連絡協議会（仮称）」の結成を呼びかけることになりました。世界天文年2009日本委員会に結集された各方面を代表する諸団体や研究機関をはじめとして、さらにアマチュア天文家などにも加わっていただき、新たな活動を広げてゆく原動力が生まれることを期待しています。

2010年4月16日
発起人代表
世界天文年2009日本委員会 委員長
海　部　宣　男

図 5　世界天文年 2009 ウェブサイト[3]にて、「日本天文連絡協議会（仮称）」結成を呼びかけ中

注　釈

[1]イベント主催者が事前に所定の申請をして、世界天文年の趣旨に合致するイベントであれば公認イベントとして承認されるというシステム（現在は終了しています）。事務局では約 2900 件にのぼる公認イベントの申請内容すべてに目を通し、その約 8 割から事後報告を得た。公認イベントに参加した人数は約 445 万人。

[2] 公認イベントの集計結果は後日公表する報告書をご覧ください。

[3] 世界天文年 2009 ウェブサイト
http://www.astronomy2009.jp/

大川拓也